

留学報告書

東京大学教養学部教養学科超域文化科学分科表象文化論コース3年
2019年度3月～7月 キャンパス・アジアプログラム交換学生
ソウル大学校自由専攻学部
磯竜太郎（いそりゅうたろう）

1.概要

大韓民国は日本の北西、朝鮮半島（韓半島）に位置する国家である。私が所属したソウル大学校は、その大韓民国北部に位置する、首都ソウルの都心部から漢江をはさんで南側に位置する大学である。クアナク山麓に建てられたキャンパスは韓国一の広さを誇っている。

年度は3月に始まり2学期制である。学期の予定は大方以下の通りである。

- 1月 入寮手申請、受講登録
- 2月中旬 入寮関係書類送付、寮費納入(期間が非常に短い)
- 2月末 渡韓
オリエンテーション、語学堂クラス分けテスト
(参加は必須ではない。
寮に入れるのは3月からなので、別に宿泊地を確保しなければならない)
- 3月上旬 学生証発行、新韓銀行口座開設、各授業オリエンテーション
- 3月中旬 受講変更期間、サークルテント列(東大に比べかなり小規模)
- 4月下旬 中間考査
- 5月中旬 学園祭(外部から屋台が来るのみの小規模なもの)
- 6月中旬 期末試験、夏季休業中の寮費納入
- 7月～8月 夏季休業(ソウル大学からの奨学金は帰国まで受け取り可能)



2. 学業面

2-1. 語学堂(言語教育院/月、水、金 9:00-12:00/韓国語/受講者多数、クラスは10名ほど)

ソウル大学には語学堂という、言語教育院が留学生や在韓外国人向けに、韓国語学習プログラムを実施している。プログラムにはレギュラーコース、イブニングコース、15週課程がある。韓国語に初めて触れる人向けの1級から、最高レベルの6級、その上には韓国語での論文指導を行う研究コースもある。語学堂の先生いわく、15週課程の級よりもレギュラーコースの級の方が難しいのだという。私は15週課程の5級(後半から6級に自動的に上がる)に所属した。生徒は10人で、国籍は香港、ロシア、アメリカ、スイス、シンガポール。授業は韓国語で行われ、休み時間は英語が飛び交っていた。

授業内容としては、2日で1課ずつ進行、1課には4つの本文と4つの文法が用意されており、韓国生活のシーンをもとに、テーマごとに課が分かれている。課が終わるごとに小テストと2人1組でロールプレイを発表する。

語学堂を通して、生活の中で使える韓国語の言い回しのレパートリー、言語の感覚を養うことができた。ニュアンス的に日本語にすると「だから～なんだって」「ずっと～し続けてみたら」など、細かい表現の違いまで伝えられるような表現が身に着いた。単語に関しては、難しくなるほど漢字の熟語の頻度が増え、日本人にとってはだんだん有利になっていくように感じた。

教室の雰囲気も非常によく、それぞれの地域の生徒たちがいろいろな話を共有しあい、何度か食事会も開かれた。また、最終授業日に生徒の一人が出前を頼み、授業中にチキンが届いて、ランチが始まってしまうという面白いイベントもあった。



2-2. The Korean Language(人文学科/月 13:00-15:50/英語/30名ほど)

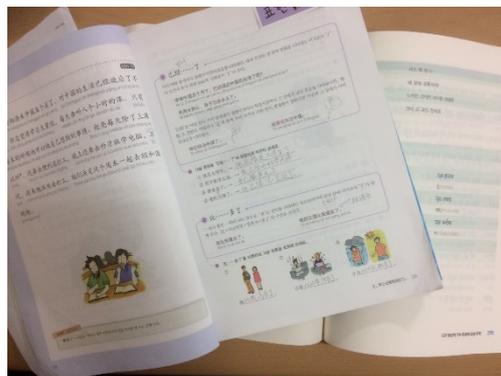
韓国の言語学の教授が留学生向けに韓国語の文字、文法、発音等について言語学的に説明していく授業である。授業は英語で開講された。韓国語を全く知らない人にも一から教える方針だったので2年韓国語を学習した自分にとっては簡単に感じる部分も多かったが、言語学の概念で韓国語を整理しなおすことができた。韓国語入門者向けと唱ってはいるが、ゼロから始める人向けには若干難しいようにも感じた。

中間テスト直後に、ハンゲル博物館に校外学習に行ったのが興味深かった。以前別のプロ

グラムで行ったこともあるのだが、今回はガイドに案内してもらいながら博物館をめぐることができ、展示の意味やハングルの由来をより詳しく知ることができた。

2-3. 中国語中級 1 (人文学科/火、木 9:30-10:45/韓国語/3 名)

中国語中級には 1 と 2 があり、私は 1 を受講した。テキストの内容は日常会話中心で比較的簡単な方だが、受講生が 3 人ということもあり積極的に発言する場面があり、生徒に合わせた発展的な学習も取り入れてくれた。授業は韓国語で行われるが、先生は優しく韓国語も聞き取りやすかった。



授業が始まると先生から中国語で世間話のような質問がなされる。それが終わるとテキストの内容に進むのだが、特にスライドにテキストの韓国語訳が表示され、それを中国語に戻すという作業が難しかった。日本語を中国語に直すのにも思考を要するのに、韓国語を中国語に直すということは最初かなり混乱した。また、中国語の韓国語訳を聞かれることも多く、日本で受ける中国語の授業よりさらに一つ壁を乗り越えなければならなかった。

テストは韓国語の中国語訳を中心に出题されたが、そのテストの前の授業で、中国語の発表、およびその期間に扱った本文の暗証のテストがあり、特に 5 課分の本文を暗記して暗証するのはかなり準備が大変な試験だったが、中国語を体にしみこませる良い機会となった。

ソウル大学を通して言語に対して力が注がれているように感じる。語学堂を始め、言語の授業も計画的で、書店に行けばコツコツ取り組めるようなわかりやすくバランスのとれた語学教材が多く売られているように感じた。

2-4. 日本の大衆文化(人文学科/水 14:00-16:50/韓国語/100 名ほど)

今学期のソウル大学留学生のうち 3 人が受講した。教授は日本のサブカルチャーを専門としており、日本の文化論、大衆文化史から、オタク論、BL 論等のコアなところまで幅広く扱い、我々日本人でも初めて触れる内容の多く盛り込まれた授業だった。例えば「かわいい文化」をギャル文字やサンリオ等から考察したり、80 年代の日本の大衆文化史として、東急の渋谷近辺の空間構想について扱ったりなどした。

教材は論文を先生が選んだものが 300 ページほどでそのほとんどがハングルだった。他の留学生と協力して論文の日本語原文を探すなどして、最初のころは教材にすべて目を通していたが、やはりハングルの教材を読むのには多大な時間を要し、予習はついていけなく

なってしまった。テストは記述式だが、記述内容というよりは、キーワードが入っているかどうか採点対象らしい。韓国では大学の成績に敏感であるため、得点の基準が明確な試験を作らないと生徒側からの抗議が相次ぐらしい。

自分の専門も大衆文化なため、大変勉強させていただいた。一見関連しないような文化史、社会・経済史を今のサブカルチャーと一連の流れとして紹介し、考察を加えるのは非常に勉強になり、世界から見て日本のサブカルチャーがどう見られているのかに興味を持つようになった。

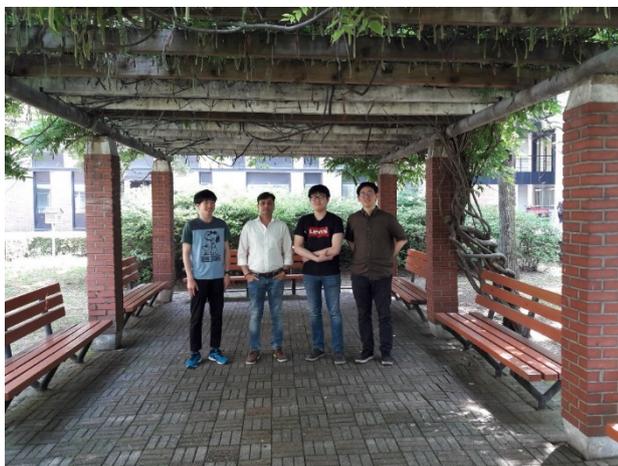
後日、日本人ということで教授に食事会に招待していただき、事務所も拝見させていただいた。同人誌を大量に集めて研究している教授の熱に尊敬を憶え、また韓国のオタク事情も非常に興味深かった。韓国では違うと思う意見に対して真っ向から意見を述べるのが主であるため、成人向けの雑誌を扱おうとした同人サークルが告発されたり、女性オタクがフェミニストから大きな反発を受けたりするのも珍しくないのだという。複雑な韓国のサブカルチャー事情を取り巻く問題が、今まで考えたこともないものばかりで驚かされた。

2-5 Hindi2(人文学科/木 12:30-16:20/英語、韓国語/2名)

日本でヒンディー語の初級文法を習っていたので、ソウル大でも受講することにした。先生はデリー出身のインド人で、生徒は自分を含め 2 人しかいなかった。授業は英語で行われた。

先生は自由な部分も多く、開始時刻が遅くなったり、外で散歩しながら表現練習したりと独特な授業が展開されたが、言語の指導に対しては明確な方針を持っていた。名詞の性は間違えても相手には伝わるし、名詞がわからないならその都度調べればいからとりあえず動詞の活用ができるようにすること、いろいろなことをいきなり組み込もうとせずまずはシンプルな文を作ること、など今後の言語学習にも役立つヒントを教わった。授業はインド人の先生と 3 時間、韓国人の研究生と演習 1 時間、計 4 時間を連続して行う長いものだったが、授業が会話練習中心で、合間あいまにも英語で様々な話題を先生と話し合うなど、ラフな雰囲気で取り組み、身に着けることができた。

もう一人受講していた韓国人の生徒は、高校時に言語学校に所属して日本語を勉強していたため、日本語が上手だった。日本語と韓国語を混ぜあいながら、ソウル大学の情報や日本での滞在経験などの話題を共有しながら下校することも多く、人数は少ないものの楽しい授業だった。



3. 生活面

3-1.寮について

2人1部屋が基本単位だが、値段によって多少部屋の形状に差があった。私は一番安い部屋に滞在した。寮へ書類を提出する期間が非常に短く、直前まで寮に入れるかが危うい状況になってしまったので、書類や寮費は期間の初日に納付することをおすすめしたい。



入寮時はマットレスとシーツ、机、いす、棚以外は部屋に何も無い。4階建てで各フロアにシャワーが2, 3個、便器が3, 4個、洗面台は2台前後ある。寮内への電気製品の持ち込みは厳しいルールがあるが、うるさく弾かなければ楽器などの持ち込みは可能で、お湯も出る浄水器が階ごとにある。洗濯室もあり、洗濯機、乾燥機が無料で使用できる、共用スペースには一台のテレビと一台のIH、冷蔵庫と冷凍庫があり料理も可能である。他の棟には読書室があり静かに勉強できるそうだが、なぜか自分の棟にはなかった。

寮内はきれいでも汚くもない程度で、半年生活するうえで苦はそれほどない。しかし、自分の建物は古かったため、電話やドライヤーは共用スペースで、深夜時間帯のシャワーは控えるように言われていた。シャワー室で熱唱している声が部屋まで響くことも多々あった。また韓国全般的に水道が詰まりやすく、トイレが度々詰まっているのを見るのに抵抗を感じた。

ルームメイトは韓国人だった。温度感覚が違ったり、夜間の電話やゲームがうるさかったりなどの不便な面もあったが、日本文化に対して興味をもっており話が合うことも多かった。日本のライトノベルや米津玄氏が好きとのことで、一緒にカラオケに行き、日本の歌を歌うこともあった。日本語は話せないのだというが、歌として覚えている日本語は発音もよく、歌も上手で驚いた。またコンピューターのセッティングなどのわからない部分も教えてもらうことがあった。

学部生の寮と院生の寮の中間部分にはいくつかの施設が集まっており、サンドイッチ店やチキン屋さん、日用品店、コンビニ、美容室、そしてコインカラオケまであり、度々個人的に歌を練習しに行った。

3-2.学校について

ソウル大学の特徴はキャンパスの広さにある。最寄り駅は地下鉄に2号線ナクソンデカソウルデック。山麓に作られたキャンパスのため、土地が広大で起伏も大きい。寮からキャンパス中心部に行くには丘を越える必要があり、教室移動はハイキングさながらであった。校内を循環する無料シャトルバスもあるが、外周を一方通行に回っているため、徒歩が

主な移動手段になった。ウル大学は何時間目が何時から何分という風に決まっておらず、授業ごとにまちまちなので、教室移動の所要時間も考慮して授業を組まなければならない。キャンパスの中央部には、ロッテリアなどの軽食街、書店、図書館がある。図書館の座席は利用時に登録する形で日本の書籍もいくつかあるが、ほとんどがハングルである。

キャンパス内で気を付けたいのは宗教の勧誘である。キャンパスの野外に一人していると、聖書を勉強しないかと度々声を掛けられる。何度もしつこく勧誘し、寮までついてくることも多いので注意が必要である。電車の中で勧誘されることもある。悪い人たちではなく、実際に本当に手伝おうとして声をかけてくるキリスト教徒もいるが、興味がないのに違う場所に連れていかれることがないように気をつける必要がある。

3-3.インターネットについて

ソウル大の建物内ではWi-fiが使えるが、寮の各部屋にはない。他の棟の共有スペースではWi-fiが飛んでいたらしいが、自分の棟にはなかったため、有線でパソコンをインターネットにつなぎ、またWi-fiのルーターも購入した。

寮のインターネットに対するセキュリティが非常に厳しく、日本のサイトは公式サイトでも入れないことが多い。しかも、これは東大側の問題であるが、U-tasのパスワード期限が切れてしまったのに、パスワードの変更は国内のアクセスからしかできないという問題が発生した。閲覧をはじめられる日本のサイトに入るためにはVPNを利用しなければならないが、VPN自体も2分くらいで接続を遮断されるケースが多く、パソコンとスマートフォンをうまく使い分けてインターネットを閲覧するしかなかった。

SIMカードを利用すれば韓国でもスマートフォンでインターネットを利用することができるが、私のスマートフォンはSIMフリーができず、ポケットWi-fiの長期レンタルを利用した。また、韓国はNAVERなど携帯電話の番号を使用して登録するものが多く、携帯電話の番号がないと不便に思うことも多かった。銀行は番号がなくてもオリエンテーションの時に登録できる。

3-4.食事について

食事はキャンパス随所にある食堂で済ませることが主である。メニューは300円から500円ほどの価格であり、学生証があれば100円引きになる。また、中央の食堂には、カウンターで買うと100円の格安メニューがあり他のメニューより質は劣るが食事としては十分な量である。

食堂で出される主なものは韓国料理であるが、簡単なチゲやスープ、ビビンバが多い。チキンやオムライスなどの洋食も出るほか、焼うどんなどの日本食が出ることも珍しくはない。食堂は基本メニューが2つか3つかしかなく、日替わりで変わるメニューの中から好き

なものを選択する形である。

食堂以外人にも、構内にはいくつか低価のレストランや、ファストフード店があり、韓国料理を中心にチキンやハンバーガーも食べることができる。またコンビニや売店も随所にあるため、そこでおにぎりなどの簡単な食事もとることができるが、品揃えは十分とはいえない。またソウル大のなかには「ヌティナム」というカフェがたくさんあり、カフェラテや抹茶ラテなどが300円弱で飲め、軽食もそろっている。

市街地まで出るとより多くの食堂がある。焼肉は非常においしいが、一人で行きづらく価格も高いので留学生の多くはほとんど行かない。学生に人気の料理はやはりチキンである。チキンとビールを一緒に食べる「チメツ」というものがブームになっており、おいしいチキンの店が多くある。チゲなどもいくつか種類があり、値段も低廉なため人気が高い。日本料理店も多く建っており、丼や寿司なども味わうことができるが、ラーメンはあまりおいしく感じなかった。その代わりに、韓国版のインスタントラーメンであり辛くて縮れ麺の「ラミョン」は大変低価格で学生がよく食べていた。

寮で自炊している人はほとんどいなかったが、自分は食器をそろえて簡単な自炊をした。鍋での炊飯や、インスタントラーメン作り、時にはオムライスやスパゲッティを作って、食費を節約していた。

4.課外活動面

休日や放課後は主に寮で日本から持ち込んだ楽器を弾いたり、課題に取り組んだりしていたがいくつか韓国人とかかわり一緒に活動する機会が得られた。

月、水、金の5時半からは体操部で活動した。体操部は体操用の新しい体育施設で活動しており、トランポリンや平行棒、体操用の床



等、各種目の設備がすべてそろっていた。部員はほとんどが韓国人で、たまに外国人やOB,OGの先輩方が来て、音楽を流しながら和気あいあいと活動していた。

最初は言語の壁を気にして、部活に入ることに大きな抵抗を感じていたが、入ると外国人の自分も快く歓迎してくれて、丁寧に説明してくれた。活動内容としては、準備体操、ハンドスプリング、ストレッチ、練習、筋トレがルーティーンであり特に最後の筋トレは筋力的につらいものだった。指導は韓国語で行われたが、体の動きで指示してくれたり、知らないことでも細かく教えてくれたりしたので、半年間で色々な技ができるようになった。自分は

床が比較的得意であり、バク転や宙返りを覚えたいという韓国人が私を頼ってくれて、カタクトながら韓国語で体操を指導するという貴重な経験もさせてもらった。練習後には食事に連れて行ってもらうこともあり、OGの先輩におごっていただいた。部員の中には日本のドラマに興味を持って、日本語を勉強しているという先輩や、札幌でスキーを習っていたという部員、パイロットで日本にも行っているというOBなど個性的なメンバーもそろっていた。ほとんどすべての練習に参加し、実際の韓国の部活に入りながら自分の技術を磨くことができ非常にうれしかった。

休日には韓国人の友人と出かけることがあった。韓国で開かれたアニメのイベントで知り合った釜山の韓国人だが、ソウルに来るときに遊びに誘ってくれ、そのつながりで他の韓国人とも仲良くなることができた。一緒にカフェに行ったり、カラオケに行ったり、韓国のアニメ同人グッズ販売会であるコミックワールドに赴いたりした。残念なことに、韓国で同じ年代の人々と仲良くなっても、軍隊に行かなければならないという宿命がある。韓国人男子はほとんど全員が2年弱軍隊に入ることが義務付けられており、軍隊から出てきたら必ず会おうと約束して入隊を見送った。



留学期間はずっとソウルに行ったので、帰りは南方をめぐってから入国した。塚や台など、仏国寺など自然と調和した名所が多い慶州、第二の大都市でありながら港町としての存在感も強く、海に面した寺や海水浴場が有名な釜山、サンゴ礁が発達しコバルトブルーの海と真っ白な砂が美しい濟州島、ソウルで都市の環境で半年過ごした身にとって、韓国の自然や歴史に触れられた小旅行

は韓国へのイメージに新たな美しい一面を見出してくれた。

5.留学の目標に対する振り返り

私は留学に際して、学業面と交流面において目標を設定した。その振り返りを行いたいと思う。

5-1.(学業面)韓国語の授業や韓国語で他の言語を学ぶ経験を通して、話者独特の価値観、意味概念を見出す

今回は語学堂で韓国語を学習するほかに、韓国語で中国語の授業を受講した。特に韓国語で中国語を学ぶというのは新鮮な経験だった。例えば中国語の可能補語を訳すときに「探す」と「見つける」が韓国語で同じ動詞のため、訳仕分けが難しかった。また、韓国語の3人称は使われる頻度が少ない一方、中国語は3人称を頻繁に使用する言語のため、韓国語の3人称を使って訳すべきか、代名詞を使わずにそのまま個人名を用いるべきか迷うことが多かった。

日本語と韓国語は非常に近接した言語だが、韓国語の授業や日常会話を通して、日本で訳せる文法とは少し適用範囲が違うものが多々あることに気づいた。例えば日本語で韓国語の「ジョ」という文末助詞を習った時に「ですよね」に対応すると認識していたが、韓国人が「ムスインリジョ? (どうしたんですか)」のように使っているのを聞いて、日本語と韓国語で訳が合致しないことを実感した。また、韓国語には熱心に勉強するを「熱勉」と訳すような、教科書には載らない略語も多くあり、SNS等のくだけたメッセージは非常に読みづらいことが分かった。文法的な要素は日本語と非常に似ているが、韓国人の感覚によっての文の使い方、文法の意味範囲において今まで知らなかった側面を見つけることができたと思う。

5-2.(学業面)韓国の大衆文化について学ぶ

留学前は韓国の大衆文化について学びたいと思ったが、韓国に来てみて韓国からみた日本の大衆文化とそれをめぐる環境についてより興味を持った。というのも、韓国では日本文化の浸透率が非常に高いからである。書店に行けば日本の漫画がずらっと並んでおり、日本のアーティストの曲が好きだという人も多い。日本のアーティストが韓国公演を行った際にその熱狂ぶりとファンの一致団結性は言語の壁があるにもかかわらず、日本のファンにも劣らないものがある。

ただ、それを取り巻く環境の複雑性は日本の大衆文化という授業を中心に新たに発見したものである。日韓関係がかなり不安定な1970年代には、日本のアニメ作品をアメリカ産と偽って放映していたこと、しかしそれによって日本文化の介入を許す形になったこと。フェミニストや反日思想など、韓国における日本文化は常に思想との抗争に巻き込まれてお

り、それは現在までも続いている。もともとの目標とは少し異なる形になったが、日本国内では見えないサブカルチャーに関する問題を見出すことができ、またその中で日韓ファン同士のつながりの必要性を感じることができた。

5-3.(交流面)同じ興味を持った学生たちと交流しあう

当初、自分は人見知りだし、個人行動も比較的好きなので、現地の人々と交流するというのは厳しいだろうと感じつつこの目標を立てたが、結果的に多くの韓国の人々とかかわることができた。

体操部に所属して一緒にソウル大生と活動できたことがまず一番大きかった。週に3度自分の好きな運動を韓国人と教えあうことで、韓国語を実際に使う機会も増え、いろいろな体操技術も身に着けることができた。交換学生で練習以外のかかわりが少なく、韓国語が流ちょうでもない自分の出国を惜しんでくれて、何度か食事に連れて行ってもらうことを持った。今度、その部員の一人が旅行で日本に来るそうなので、案内する予定である。

また、アニメ関係のイベントで初めて知り合った韓国人から輪が広がり、遊びに行けるようになったこともとてもうれしく感じた。軍隊に行ってしまうということなので、除隊後に会いたいと思う。

6.留学を通して

留学を通して、短期プログラムでは体験できない日常生活、そして、今まで以上に現地の人々に関わる機会を持つことができる。

明確に伸びたのがわかるのは語学力である。まだまだ分からない単語やすらすらでない表現も多いが、韓国語の会話パターンをつかめるようになった。韓国人の中に日本語を話せる人は比較的いるのだが、日本人の中で韓国語を話せる人は少なく、韓国語で会話するとほめてくれて好感をもってくれる。英語ができればどの国でも生活はできるかもしれないが、その国の一員として文化とかかわりながら暮らすためには言語を覚えて実際に赴き話して生活することが良い経験だと思う。

その国の価値観や考え方も学ぶことができた。韓国人はおごりの文化があって、年上が結構おごってくれることや、団結性があり違うと感じる意見にはしっかり反駁する人が多いということなど、日本とは別の独特の傾向があることが感じられ、その一方で、日本文化、日本の価値観のもとで作られた漫画やアニメが、これほどに韓国に浸透していることも面白いと感じた。反面、その国をひとくりにできないということもわかるようになった。今反日が高まっている時期で、日本人から滞在を心配される声も度々あったが、周りの人々はみな優しく、公平な視点で日韓問題について尋ねた。テレビでは、反日、不買運動などが取

りざたされているが、街には日本料理店があふれ、不買運動に協力しようとしている人が、寿司やとんかつを食べているケースも少なくない。韓国人は日本のことが嫌いだと思われがちだが、人によってまちまちであり、誰もが強い思想を持っているわけでもない。そこにあるのは概念ではなく人々であり、感情の揺れ、考え方の揺れが時と場合によって常に変化している。だから私は、日本の人にもっと韓国を知ってほしいと思うし、日韓でお互い分かり合えるような部分がたくさんあることを見失わないでほしいと思う。日本人交流会という会合にいらっしゃった、ソウル大で日本の庭園について教えているオランダ人の教授がおっしゃっていたことには「国民性、国民性とよくいわれますけれど、となりあって似通った日本と韓国でなぜ国民性という言葉がこれほど使われるんですか」とのことだった。国民性という傾向は時にその国を大まかに理解する上で重要ではあるが、国民性でくくりきれない一人一人の考え方は現地で長く一緒にいるうえで分かってくるものだと思う。

留学報告書を書いてきたが、留学で体験したものを言葉として、文章として表現できるのは、経験そのものの一握りでしかない。留学前に立てたプランや目標をかなえることだけが留学ではなく、逆に想像もしていなかった体験がほとんどになると思う。ちょっとでも行ってみたいという衝動があれば、まずはそのほんの一握りを言葉にして、あとは実際に踏み入れることでその衝動の意味を得られることができると思う。